

「沖縄の看護行政 70 年のあしあと」編集・出版を通して
歴史資料保存の重要性を実感

約 2 年の編集作業の結果、2017（平成 29）年 12 月に「沖縄の看護行政 70 年のあしあと」を出版しました。その際、県庁に勤務した経験のある看護職者（看護師、保健師、助産師）による記録と証言を中心に、戦後の公衆衛生関係者、医療関係者、看護職者が執筆した書籍や冊子、文書、統計資料、記念誌など（以下資料と記す）の収集と分析から始めました。

県立看護大学図書館を中心に県情報センターや県立図書館、県公文書館などを訪問して関係資料を収集しましたが、非常に時間がかかることとなりました。

その主な原因は、本土復帰前の資料の保存に乏しいこと、保存されていても冊数が乏しく、貸出禁止となっている資料が多いこと、そもそも紙面での資料がないこと等でした。そうした中で、貴重な資料が見つかった時の感激と感動は忘れられません。

同時に復帰前の資料はガリ版印刷物でかなり劣化しているものが多く、また、出版印刷物でも劣化しており、入手困難な資料となっているものが非常に多くありました。

資料自体を保存しなければ、史実としての沖縄の公衆衛生活動、医療活動、看護活動が残らないことを実感しました。また、本土復帰前に活躍された方々は、高齢化が進み所持保管している資料にも限界を生じています。

当時の図書館長であった佐伯宣久先生にご相談した結果、「沖縄関係の公衆衛生、医療、看護活動に関する著書、文書等の保存を検討したい」とのご意見を頂きました。

その後「沖縄医療保健看護歴史資料保存公開事業」が発足し、県立看護大学図書館を中心に、現在も資料収集・分析作業を継続しています。

戦後、沖縄は米軍の統治下で、無から公衆衛生、医療、看護活動を生みだしてきました。それは時代の推移とさまざまな外圧に屈することなく血のにじむような努力をされた先人たちの歩みの結晶であり、歴史と重ねて考察しなければならないと考えます。県内に散在する資料を県立看護大学に収集し保管する意義は、沖縄の公衆衛生、医療、看護への貴重な史実へのアプローチです。

沖縄特有の歴史の中を生き抜いた先人たちからのメッセージとして「沖縄医療保健看護歴史資料公開事業」は、過去現在を紐解き、今後の公衆衛生、医療、看護活動の発展につながる資料の宝庫となると考えます。

最後に、資料収集における図書館業務専門員の支援の重要性を実感しています。図書館は、閲覧図書に関する業務だけでなく、倉庫に保管している古い図書の整理など多岐にわたり専門職の役割を果たしていることも、改めて知る良い機会となりました。

図書館長はじめ、職員の皆様に感謝申し上げます。

2022（令和 4）年 12 月

「沖縄医療保健看護歴史資料保存公開事業」推進委員 吉川千恵子